

歴史におけるプラトン像

W・イエーガー
村島義彦訳

プラトンが、ギリシアにおける精神世界の中央に歩み出て、かれの学園アカデメイアに世の人すべての目が注がれるようになって、早くも二千年以上の歳月が流れた。これほどの歳月を経ながらもしかし、あらゆる哲学の基本性格はおしなべて、そもその哲学がプラトンにどうあつたかに今も変わらずに規定されている。たとえば、プラトン以後の古代の世紀はすべて、自らの精神的な特色の内に、どれほど絶えず変容を遂げたにせよ、プラトンという人物の特徴をはつきりと刻印していた。そしてついに、古代後期の最後の世紀を迎えて、こうした特徴は、新プラトン主義の普遍的な知性宗教という形でようやく一体化した。その古典古代は、まずもってキリスト教を迎え入れ、次いでこれと融合し、そうすることでキリスト教と共に中世の世に受け継がれていったが、これ自体はしかし、どこまでもプラトンを下敷きに据えた文化であった。こうした基盤を想定してはじめて、アウグスティヌスのような人物も正しく理解されるにちがいない。というのなかれば、自らの『神の国』で、中世的世界像の歴史哲学的枠組みを築き上げるにあたり、巧みに、プラトンの『国家』をキリスト教化していたからである。中世における東方世界と西方世界の文化は、その絶頂期に、古代哲学が保持した普遍的な世界概念をわがものとしたけれども、この底には、アリストテレス哲学の受容が大きく立ち働いていた。そして、ここにいうアリストテレス哲学

は、まぎれもなくプラトニズムの別様式だったのである。こうした中世を経由して、古典古代とその人間性追求（ヒューマニズム）が新たに息を吹き返したルネッサンス期にいたると、それまでの風潮に反撃する形でプラトン自体が再生し（いうならば『プラトンのルネッサンス』）、西洋中世がその大部分を知らなかった当人の作品類も新たに発見されることになった。とはいえ、ここにいる『プラトンのルネッサンス』も少なからぬ制約を抱えていた。中世のスコラ哲学におけるプラトンの底流は、そもその源を、アウグスティヌスの奉じるキリスト教化された新プラトン主義や、アレオパゴスのディオニュシオスという筆名をもった神秘的な神秘家の作品に大きく仰いでいたし、さらには、ルネッサンスで再発見されたプラトンへの理解も、何はともあれ、いまだに命脈を保っていた『キリスト教化された新プラトン主義』の学派的伝統に固く結びつけられていたからである。こうした学派的伝統は、トルコの手でコンスタンティノーブルが攻略された頃、数々の写本と一緒に、この地からイタリアに移された。だから、ビザンティンの神学者で神秘家のゲミストス・プレトンが、クアトロセントのイタリア人たちに仲介したプラトン、さらにはマルシリウス・フィキヌスが、ロレンツォ・デ・メディチの手でフィレンツェの地に設立されたプラトン・アカデミーで教えた当のプラトンは、実のところ、プロティノスの目を通して眺められたプラトン

であった、といえるだろう。こうした風潮自体は、それに続く啓蒙の世紀をへて一八世紀の終わりに至るまで、基本的にはほとんど変わらなかつた。プラトンは、世の人びとの目には、主として宗教的な予言者で大きな神秘家と映っていたわけである。このようにイメージされたプラトンは、しかし、新時代の文化が自然科学と数学を重視する合理主義の精神で徐々に染め上げられるにつれ、しだいに力を失っていった。これに呼応して、プラトンの影響範囲も、その時代の神学面と審美面での動きにしだいに限られていったのである。

こうした傾向はしかし、一八世紀の終わり頃に、シュライエルマツハーを介してはじめて劇的に転換され、ここに、本当のプラトンを発見する道が大きく拓かれることになった。というのも、シュライエルマツハーは、まさしく正銘の神学者であつたのだが、その実、ドイツ文学とドイツ哲学の領域で新たに目覚めた精神生活と積極的な交流を図っていたからである。当時もやはり、プラトンの中に求められていたのは、諸々のアイデアを思索する形而上学者であつた。プラトンの哲学はだから、認識論的世界観の不滅の原型として、ひたすら取り組みの対象とされていたのだつた。ちなみに、ここにいる「認識論的世界観」は、今日では加度的に消滅の道を歩んで、その学問的な生存権も、カントの認識批判を介して激しく根元を揺さぶられている。

プラトン自身は、今もって延々と続くドイツ哲学の偉大な観念論体系の時代に、いささかも変わらなかつた、新たな形而上学的エネルギーが次々と汲み出されるべき「若さの泉」であり続けていた。そして、「壮大な観念論体系」という理念的建造物の構築にいそむ学者たちは、おしなべて、このエネルギーに触れて激しく魂を鼓舞されたのであつた。かれらの間では、プラトン当人は、単なる一介の哲学者というよりは、あくまでも別格の哲学者として仰ぎ見られていた。こうした中で、ギリシア精

神の新たな再生（ルネッサンス）に好都合な雰囲気徐徐に造り出されていったけれども、その過程で着手されたのが、他でもない、プラトンの著作への営々とした研究であつた。この研究は、当時の世界に新たに登場した古代研究の歴史的手法を用いて進められ、これを介して、プラトンという時代を超越した偉人は、当人の生きた時代にいつそう引き戻され、かれ自身にも、特定の歴史的人格にふさわしい明瞭な輪郭がいつそう付与されることになった。

ここに掲げられた「プラトンを復元的に理解する」という課題は、あえて断るまでもなく、およそ古代の著作家なら：プラトンに限らず：あまねく課すであろう最も困難な課題の一つにちがいない。プラトンの哲学はこれまで、一八世紀の手法に則つて、そもそもの復元に努められてきた。それは実に、個々の対話篇から、そこに目にされる限りの教えの中身を抽出するという仕方であつた。こうした仕方に入手された中身の数々から、より後の哲学を手本にしつつ、プラトンの形而上学と自然科学と倫理学の何であるかが解き明かされ、次いで、解き明かされた中身を介して、さらに全体的な体系の構築が意欲的に企てられた。全体的な体系が不明であるなら、お目当ての思想家の輪郭など、とうてい思い描けるものではないと考えられていたからである。シュライエルマツハーの功績は、こうした考えを突き崩したところにあつた。というのもかれは、ロマン主義者の鋭い眼差しで、ここにいう体系とは当人の精神的個性が表出されたものである、と正しく捉えた上で、プラトンの「生きた哲学」が、いわゆる閉じられた体系などを追いつめず、むしろ、徹底した吟味を主体とした哲学的な問答の形で登場した点に、他でもないプラトン哲学の独自性は認められるのだ、と正しく洞察したからである。その場合にかかれは、個々の対話篇には、同じように哲学的問答を紹介しながら、構成の上で明らかな差の認められる点を断じて見逃さなかつた。

だからかれは、そうした基準に則つてプラトンの作品を、いつそう哲学的に隙なく構築されたものと、単に導入的で形式的なものに区分した。これによって、各々の対話篇にみられる相互の内的関係も、さらには、個々の問答中に多少なりとも完全にその輪郭を覗かせている、そもそも理念的全体との内的関係も共に明かされたけれども、シュライエルマッハーはしかし、プラトンの固有性をあくまでも次の点に見定めていた。すなわち、プラトン自身にいつそう重要であつたのは、哲学とその本質を、出来上がった教義体系の形で世に示すのではなく、ひたすら問答法の生きた動きの中で克明に描き示す方であつたのだ、と。これと同時に、シュライエルマッハーはまた、同時代の連中や論敵との論争的な関わりもプラトンの作品中に嗅ぎつけて、当人の思想が、当時の哲学界の内情と多様性からまり合つていた点も明示した。およそこのように、プラトンの作品を解説する人間に課されたそもそもの課題は、さまざまの仮説を要求したので、ここから、一つの解釈概念が新たに誕生した。その解釈概念は、文法面と古書面に狭く限定された従来の文献学が知つていたものより、はるかに新しく次元も高かつた。世の人はだから、これを評してこう噂したのである。アレクサンドリアの文献学が、はるか古代にホメロス研究を介して自らの方法論を樹ち立てたように、一九世紀の歴史的な精神科学は、プラトンの問いを正しく理解しようと奮闘する中で、最高の純化と洗練に至りついたので、と。

ところで、論議の喧しいこうした問題をあえて現代まで詳細に辿るのは、ここでの仕事にふさわしくあるまい。そうした歩みはおしなべて、シュライエルマッハーが初めて着手し、しかも見事に成し遂げた企て自体と同等の高みにとうてい導かないだろう。シュライエルマッハーの場合、個々の事柄には文献学者に固有の入念さで、そしてまた、理念的全体には芸術家と思索家の卓抜な予感の目で立ち向かいながら、プラトン

の哲学とその著述という「驚異の生きもの」を、まことにバランスよく把握したからである。テキスト自体の個々にわたる解釈と、プラトンの名で伝えられる各々の作品の真贋への吟味は、個別研究に道を拓いて、これは、際限を知らず特化されていった。実のところ、C・F・ヘルマン以後、プラトンの作品を、当人の哲学における漸進的発達の表出である、と捉える見方が広く世に行き渡つていく。けれども、こうした方向を採るかぎり、プラトンが掲げる問いの全体は見失われざるを得ないのではないだろうか。今や、これまで等閑に付されてきた「個々の対話篇の成立年代を問う」という問いが、新たに關心の前面に押し出され、しかも、決定的な重要性を手に入れている。これまでは、個々の作品の年代を絶対的に決定する手立てがほぼ完全に欠けていたから、執筆の時間的順序は、作品の本身に依拠しながら、わけでも、連綿と続く作品群の底に認められる一つの教育プランを証拠に仰ぎながら、何とか特定されてきた。これ自体は、考察の方法としても自然で実に分かりやすく、わけてもシュライエルマッハーは、そうした代表表格に祭り上げられてよいだろう。ここにはしかし、ある仮定が存在した。すなわち、およそ対話篇は、プラトンの思索における無意識裡の発展を映し出した「活字の鏡像」であつて、そうした発展の各段階は、当の対話篇の中に明瞭に識別できるはずだ、という仮定で、これに影響され、この方法は激しく根底を揺さぶられたように思われる。ともあれ、作品の本身的分析は、個々の作品の時間順序について一定の結論を導き出した。そうした結論にはしかし、さまざまの矛盾が溢れていたもので、さらに新たな試みが始まされ、対話篇の文体変化をひたすら厳密に観察し、ある種の対話篇群が共通に具える「徴標」としての特定用語の分布状況を確認する中で、作品の相対的な年代が何とか根拠づけられるようになった。こうした探求の方向は、当初はそれなりの成功を収めたが、あまりにやり過ぎた結果、

ついには評判を落とす羽目に陥った。というのもこれは、まことに僭越にも、用語統計の道にひたすら徹するなら、個々の対話篇もすべからず成立年代を確定できる、と錯覚したからである。そうはいっても、シュライエルマツハー以来のプラトン理解が経験した最たる改変は、何はともあれ純粋に文献学的な発見に基づくのだから、これを忘れたなら、やはり忘恩の誇りは免れまい。スコットランドのプラトン解釈者として有名なルイス・キャンベルは、幸運にも、一連の比較的長い対話篇が、未完のままに残されたプラトン最晩年の『法律』で目にされるような、いくつかの文体上の特徴を介してグループにまとめられる点を観察して、ここから、こうした特徴はプラトンの晩年の文体でも顕著に認められる、と正しく結論した。このような仕方では、個々の対話篇の相互の時間順序をすべからず確定するのは不可能としても、他方、年代による三つの主要な作品グループなら十分に区分もでき、しかも、より重要な対話篇はすべて、まことに高い確率でこれらに割り振られることができた。

いわゆる「用語統計」に依拠した文献学的な吟味から導き出されたことでの結果は、もはや古典的と言われてよいシユライエルマツハーのプラトン像に、まさしく致命的と言われてよい打撃を与えたにちがいない。というのも、シユライエルマツハーによって初期の導入的な作品と判断されていた、方法論の問題に一貫して取り組んだいくばくかの対話篇が、さにあらず、円熟した晩年の作であった、と（用語統計の上で）判明したからである。プラトン哲学の解釈全体は、過去半世紀の長きに互って基本的に微動もしなかつたけれども、これを介して、完全な改変へと強く後押しされることになった。『パルメニデス』や『ソフィステス』や『ポリテイコス』など、晩年のプラトンが自らのイデア論と鋭く対決しているように見受けられる「弁証法的」な対話篇の数々が、今や、突如として議論の焦点に躍り出てきた。そうした新たな発見の時期に、一

九世紀の哲学は、ドイツ観念論の偉大な形而上学的体系が崩壊したのち、自らを批判的に反省して、改めて、認識とその方法をめぐる問題に立ち戻ろうとしていた。その一部は、カントの批判哲学で自らを新たに方向づけようと望んだのだった。ここにみる新カント主義は、プラトン哲学の晩年期の展開の中に自らの問題状況の思いもかけない反映を目にしたのだが、そうした反映はしかし、プラトン対話篇の新たな年代決定を介して表面化したのではなかったか。新カント主義は、これを目にして大いに驚きかつ魅了されたけれども、当の反映自体はさほど驚くにもあたらない。新カント主義を奉じる或る者は、プラトンの晩年の作品では以前の固有の形而上学が放棄されていると解釈し（ジャクソン、ルトスラウスキーの場合）、さらに別の或る者は、諸々のイデアを、そもその始めから新カント主義の意味に解して、いわゆる方法論として理解した（マールブルク学派の場合）。いずれにしてもしかし、現代の哲学は、ここにみた新たな全体解釈ののち、プラトンの意味をひたすら方法論の側面に絞り込んで考えようとした。これに対して、先行する半世紀のひたすら形而上学に傾斜した哲学は、逆に、カントの批判哲学と闘う上でプラトンとアリストテレスの形而上学に依拠したから、あくまでも、そうした点にプラトンの意味を絞り込んだのであった。

さて、新たなプラトン解釈は、プラトン自身の思索の中心点を方法論の問題に絞ること、それ以前の形而上学的な解釈と大きく対立したけれども、前者にはしかし、後者との共通項が明らかに存在した。というのも、双方ともにイデア論を、プラトン哲学の真の内実と把握していたからである。すでにアリストテレスも、基本的にはこう把握していた。というのもかれは、プラトンの教えを批判するにあたり、そもその矛盾先をここ（「イデア論」）に向けていたからである。新たなプラトン解釈はしかし、プラトンのイデア論に申し立てられたアリストテレスの異議

がまさしく誤解に基づいている、と論破する中で自らの頂点を迎えた。もつとも、こう論破することでこの解釈は、アリストテレスと異なる解釈を採りながらも、プラトンを読み解く際のすべてをこの点（『イデア論』）に集中させていたから、そもその源をアリストテレスに仰いでいた、と間接的に立証したことになるだろうか。プラトンの教えに対する批判的論究は、あえて断るまでもなく、すでに当人の存命中にアカデミアの内部で、それも、弁証法的な対話篇も示すようにかれの晩年期に、かなり頻繁に、わけでも存在論と方法論に絞り込んで盛んに展開されていた。アリストテレスのイデア論批判は、そうした論究から生み出されたのであった。けれども、このような展望でいかに尽力しても、プラトン哲学の全体はどうてい包み切れないだろう。この点は、たとえば『クリトン』や『ゴルギアス』から『国家』にいたる一連の対話篇を一瞥しても、ほとんど明らかにちがいない。加えて、プラトンの晩年においてすら、こうした論争の傍らに『法律』のような作品が存在し、この作品は、分量の上でプラトンの全著作のおよそ二〇パーセント強を占めながら、そこでは、総じてイデア論がいかなる役割も演じていなかったのである。にもかかわらずプラトンのイデア論は、新たな形を整えて一九世紀の哲学的観念論の前面に登場し、そうしたイデア論への関心の集中は、哲学自体が論理の領域に徐々に限定されていく中で、かえって強化されていった。このような事態も、しかしながら、まんざら納得がいかないわけではない。おそらくは、アカデミックな学派哲学が抱いた強い願望も、こうした傾向を決定づける役割を共同して果たしたのではないだろうか。というのもこの哲学は、プラトンの対話篇から特定の教義内容（たとえばイデア論）に結びつく判断されたすべてを——しかも、自らの時代がプラトンの哲学だと判断し、それゆえ、プラトンの本質だと判断した事柄をわけでも尊重しながら——汲み上げようと、飽くことのない願望を絶えず湧き上がらせたからである。

ところで、前方に向けた貴重な一步を後押しし、それまでのプラトン解釈のあまりに狭い枠組みを壊す方向に、真心を尽くして哲学の様式を導いたのは、今度もまた文献学的な発見であった。この発見は、今回はしかし、作品の年代決定の領域でなく、あくまでも真偽判定の領域で生じた。われわれの手に集められたプラトンの作品が、単に真作ばかりでなく偽作も共に含んでいたのは、すでに古代から知られていたけれども、そうした原典批判は、一九世紀に至ってはじめて真に徹底をみたのだった。けれどもそれは、あまりに懐疑を徹底させ、あまりに行き過ぎたから、つまるところ停止しないわけにはいかなかった。原典批判はこのような、多くの点で未解決な宿題を後に残したのだが、プラトン哲学の解釈は、幸い、それがゆえの影響をほとんど受けなかったように思われる。というのも主要作品の方は、判断力を具えた者の目には、真作という点で疑いの余地はなかったし、この点で異議が唱えられたのは、主として、品質の疑わしい二次的な作品類に限られていたからである。あえて偽作とみなされたのは、二次的な作品類以外では、プラトンの書簡集があった。というのも、プラトンの名を付して古代から保存されてきた書簡集には、当然に偽作も含まれていたから、これに鑑みて、すべての書簡が「真作ならず」と無慈悲に却下されたわけである。そうした上でしかし、幾つかの書簡にはプラトンの生活と、シユラクサの僭主ディオニシオスの宮廷への旅を描いた、きわめて価値の多い歴史的資料も満載されていたから、ここでの「書簡集の偽作性」と辻褃を合わせるべく、そうした書簡の執筆者は、自らの偽作活動に向けてすぐれた情報を調達する術に長けていたのだ、と仮定されたのだった。とはいえ、エデュアルド・マイヤーのような歴史家は、歴史文書としての書簡の高い意味に鑑みて、すでに、その種の書簡の真作性を大々的に擁護していた。

世の文献学もまた、ヴィラモヴィッツの証明を承けて、のちには歩調を共にした。というのもヴィラモヴィッツは、自らの偉大なプラトン伝で、書簡集のとりわけ重要な部分を占める『第六書簡』と『第七書簡』と『第八書簡』を、間違いない真作であると証明したからである。以来、こうした理解の線に沿って、プラトンの全体像を何とか結論づけようと、さまざまな努力がひたすら重ねられてきた。そうした中で導き出された結論は、この問題に、発見の当初にまさる数倍の効力を発揮したのである。

ヴィラモヴィッツが自らの作品で描き出したかったのは、プラトンの哲学でなく、あくまでもその生活であった。だからかれは、僭主の回心を促すためにシケリアに旅立たれた経緯をめぐり、そしてまた、プラトン自らの政治的發展をめぐり『第七書簡』での当人の報告を、ひたすら伝記的観点から評価して、これこそは最高級の自伝的文書であると褒めたたえた。当の報告には、現実の政治生活に積極的に介入しようとするプラトンの再三の試みが綿々と綴られていて大いに興味を引くのだが、こうした叙述はしかし、プラトンの生活史の語り手に、そもそも何を供給してくれるのだろうか。そこには、アカデメイアに隠遁した哲学教師の物静かな生活を劇的に中断した華々しい政治場面だけでなく、この物静かな生活の心理的に錯綜した背景も明らかに漏らされていた。というのも、アカデメイアの生活を彩る観想的姿勢は、今では十分に看取されるように、それと真反対の時局に悲劇的に強制されて、生まれ持った統治者本性を抑える中で何とか手に入れられたものであったからである。おおよそそう眺めると、プラトンが政治家の経歴に向けて再三のスタートを切ったのも、決して、純粹な認識生活上の不幸なエピソードなどではなかったように思われる。こうした認識生活でかれ自身が求めていたのは、実に、自らの哲学が奉じる倫理原則の政治的な実現であったからで

ある。そうはいっても、『第七書簡』で自らの精神的發展のいかにあったか、自らの生活が何を目標にしていたかを積極的に語り、こうした観点の下に自らの哲学姿勢までも決めた当の人物が、他でもないプラトン本人であったのを承認するなら、このことは、プラトンの「哲学という仕事」を全体的に解釈する上に決定的な意味を持たないわけにはいかないだろう。おおよそ生活と仕事は、こうした思想家では、わけても切り離しがたいからである。「当人の哲学的活動のすべてが当人の生活の表出であって、それゆえ、当人の生活はそのまま当人の哲学でもある」という言葉が、もしも世の誰かに当てはまるとすれば、それこそはまさに、プラトンを描いてないのではあるまいか。『国家』と『法律』という二つの名著を執筆した人物にとって、政治に関わる事柄はあくまでも、これらの作品から実践行為に突き進まれた際に、——『国家』的な意味でも『法律』的な意味でも常に——生活の単なる特定部分というよりは、自らの精神的生存全体の基盤そのものであった。政治に関わる事柄は、実に、プラトンの思索が掲げた中心的な主題であって、これの下に、その他の事柄はすべからず包括されていた。わたしは、プラトン哲学の本質を何とか理解しようと長年にわたって絶え間のない努力をくり返した末、ようやく、こうした解釈に辿りついたのだ。その際、プラトンの書簡には主たる注意を払わなかった。というのも、書簡の真作性に強く異を唱える文献学的世界の偏見に、わたし自身、若い頃から深く共鳴していたからである。そうしたわたしに翻意をうながし、『第七書簡』の自伝的報告が真実であると信じ込ませたのは、実に、ヴィラモヴィッツの研究者的個性のまばゆい輝きや、かれが示す根柢の強い説得力もさることながら、何はともあれ、次のような事実であった。すなわち、わたしが一顧だにしなかった書簡自体に盛られたプラトンの自己分析の中身が、あらゆる点で、すべての対話篇を分析するという骨の折れる道を歩んで

わたしがようやく辿りついたプラトン哲学の解釈を、もの見事に予想させたからに他ならない。

ところで、これに続いてさらに、プラトンの全作品を個々に漏れなく分析してみせるなど、この箇所では、とうていできる相談ではない。もつとも、教育の本質をめぐってプラトン本人が展開した教え自体の哲学的構造を、かれ自らが対話篇の順を追って、段階を踏みつつ徐々に打ち明けていった仕方でも直視してみることだけは、どうしても省けないだろう。プラトンの精神世界では、教育の問題にどうした中心的位置が割り当てられていたのか、この問題はそもそも、どうした根から生い育ってきたのか、それはさらに、かれ自身の「哲学という土壌」にどうした様式をもたらしたのか——これらの点は、是非とも読者に知ってもらわなくてはならないのである。そのためには、プラトンの思索の行程を、そもそもその源からはるか頂点まで、つまりは『国家』と『法律』という二つの主著まで辿らないわけにはいかない。そうした際に、小さな対話篇の数々はまとめて一括されてよいけれども、『プロタゴラス』や『ゴルギアス』や『メノン』や『饗宴』や『パイドロス』など、いつそう大きな作品類はしかし、教育をめぐるプラトンの主たる思想が含まれているため、個々別々に評価される必要があるだろう。『国家』と『法律』は、こうした見方に立つなら、評価における正銘の核をおのずと形造ることになる。われわれの努力は、終始一貫、ここから導き出されるプラトン像をギリシアの精神史にはめ込んで、その全体関係を描き出すことに向けられてしるべきだろう。プラトンの哲学は、歴史的存在としての生きた文化（つまりはバイディア）の頂きに燦然と位置している。かれの哲学は、このように捉えられた時、単なる抽象化された概念体系としてでなく、ギリシア精神の全体行程の中で、しかも、ギリシアの伝統の大きな歴史の中で、どれほど有機的に立ち働いているかの實際を垣間見

させてくれるにちがいない。そうした哲学の技術的な仕組みの詳細は、この場合、歴史自体がプラトンの思索に課した、そして、かれの仕事がまさにその具体化でもある当の問題の造形的輪郭に比べるなら、やはり一時的に後に回されるほかはない。ともあれ、ここでの力点は、プラトン哲学の本来の内実である「政治的」な目標設定に置かれていた。だとすれば、「政治的なもの」という概念を規定するのは、ここでの関係を踏まえて、教育の歴史全体、わけても、ソクラテスとその活動の「国家的」意味についてこれまでに語られてきた中身自体、となつてしかるべきである。教育そのものを、人間と国家の理想的関係を具体的な形で伝承する「遺傳的形態学」と捉えるなら、そうした教育の歴史こそ、プラトンを正しく理解する上で不可欠の哲学的背景といえるかもしれない。真理の認識に向けた汗と努力はすべて、プラトンにあつては、ソクラテス以前の偉大な自然哲学者の面々が考えていたように、世界の謎をひたすら解き明かそうと求める衝動によつてではなく、正しい人間生活の維持と形成に、そうした認識が必要不可欠である点に鑑みて、つまりは最終的に正当化されていた。プラトンは、最高の人間的な徳を具体化する必須の枠組みとして、真の意味での共同体を何とか構築しようとした。かれの着手した改革の仕事に生きた生命を吹き込んだのは、ただ単に事柄の本質を知的に掴むだけでなく、さらに進んで善自体を実践的に創り出すという、ソクラテスに体现された大いなる教育者精神であった。『国家』と『法律』という二つの偉大な教育体系が、プラトンによる文筆活動全体の輝かしい絶頂を形造っていた点からも明らかのように、かれの思索は絶えず、「教育すること」の哲学的前提を問うという課題を中心に回転し、しかもその際、こうした課題こそ人間形成を押し進める最高の力なのだ、と固く自覚されていたのだった。

このようにプラトンは、ソクラテスの後継者として確かな一歩を踏み

出すと同時に、ソクラテスの手で先鞭のつけられた、当時の偉大な教育力の数々や国民の歴史的伝統——より具体的には、ソフィストの姿勢と弁論術、国家と立法、数学と天文学、体育と医学、詩と音楽——を向こうに回した容赦のない批判的対決において、大きく主導権を握ったのだ。ソクラテス自身は、「善の知」を視野に入れながら、ひたすら目的を指し示し規範を定めたのだが、プラトンは他方、「そもそも知とは何なのか」の問いを投げかけながら、そうした目的に至る道をひたすら見つけ出そうと奮闘した。かれは、ソクラテスの「無知の知」という純化の火を通り抜けた末、これをもさらに超えて、ソクラテスが求めに求めた絶対価値の知に分け入った。そして、この知を介して、学問と生活の失われた合一を改めて取り戻したのだった。プラトンの「哲学的探求」は、そもその源を、ソクラテスの「哲学的実践（ピロソペイン）」に仰いでいた。かれの哲学は、まさしく教育そのものであって、「人間自身を最も偉大な仕方教育する」という問題にひたすら答えようと努めていた。この事実は、ギリシアの思想体系史に占めるプラトン哲学の位置を、何にもまして表示しているにちがいない。かれの哲学はさらに、哲学と認識こそ陶冶の最高の様式なのだ、と実証したことで、ギリシア教育史に占める自らの位置もやはり端的に規定したのであった。プラトンの哲学は、すぐれた人間の養成という問題を直接に継承し、これ自体を、新しい存在秩序と価値秩序でゆるぎなく基礎づけた。こうした秩序は、かれの手で、あまねく人間陶冶が自らの基本的苗床に仰いでいた「宗教」と置き換えられたわけである。というよりはむしろ、この秩序自体が、まさしく一つの新しい宗教であった。プラトンの哲学は、こうした点で、デモクリトスの唱えた自然科学の体系と大きく異なっていた。デモクリトスの体系は、連綿と続く学問史において、プラトンの思索に比肩する世界史的な出来事とみられてよく、事実それは、ギリシアにおける旺

盛な研究者精神が生み出した独創的所産として、哲学史の手で、あくまでも正当にプラトンの思索と対置されている。ギリシアが生んだこの年若い自然哲学の草分け的な人物を、われわれは、教育史に占める当人の意味に鑑みて、いわゆる「合理的思索の創造者」として積極的に評価してきたが、当の自然哲学は、アナクサゴラスとデモクリトスの時代について、学者連中や研究者仲間の大きな関心事に昇りつめていった。ソクラテスとプラトンの手で一つの哲学様式が生み出されたのは、こうした風潮の只中であり、生み出された様式はしかも、本当の教育をめぐってソフィスト連中の煽り立てた論争に強力に介入して、この論争に向けた正式の裁定をしつこく要求した。対して、自然科学的な哲学の方は、プラトン以後の哲学界で、早くもアリストテレスの手を借りて強い威信を手に入れた。とはいえ、古代後期のあまねく哲学体系に教育者精神のいくばくかを分かち与え、これを介して哲学一般を、古代後期における最大の陶冶力にまで高め上げたのは、あくまでもプラトンを措いて他になかった。アカデメイアを創設したこの人物は、哲学と学問が正銘の人間形成の力として認識され、かつ、そのように教えられている処ではどこでも、「古典期を代表する人物」という評価を手に入れて何ら問題はないのである。

(本学文学部教授)